

Eine Produktion der PRISMA Filmproduktion GmbH.-Michael Seeber Heinz Stussak
Hergestellt aus Mitteln des BMWFK, ORF (Film/Fernseh-Abkommen)
und mit Unterstützung des Amts der Vorarlberger Landesregierung
©1995 by PRISMA Filmproduktion GmbH.

ヘッドド・ビューマン・ドキュメンタリー

エデンへの道

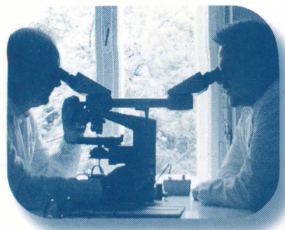
ある解剖医の一日

Ein Film von = Robert Adrian Pejó
Mitwirkender = Keserú János
Kamera = Wolfgang Lehner
Schnitt = Robert A. Pejó
Musik = Paul Winter
Ton = Frigyes Wahl
Produktionsleitung = Gábor Sarudi
Buch und Regie = Robert A. Pejó



ロバート・エイドリアン・ペヨ 監督作品

'96年モントリオール国際映画祭ベスト・ドキュメンタリー賞受賞
'96年ロッテルダム国際映画祭観客投票ベストドキュメンタリー作品



エデンへの道

ある解剖医の一日

Der Weg nach Eden

監督・脚本

ロバート・エイドリアン・ペヨ

撮影

ウォルフガング・レーナー

1995/ドイツ/カラー/86分

日本語・英語字幕

Japanese and English Subtitled

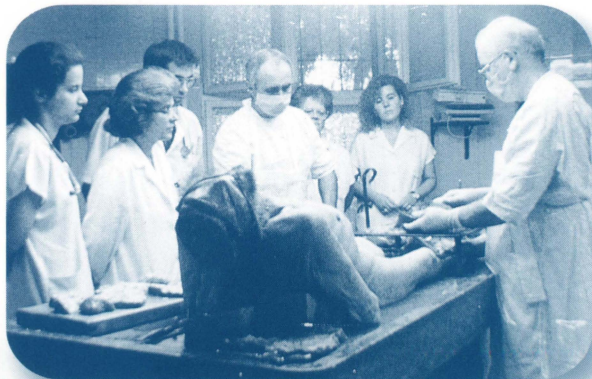


毎日、生命の終わりに立ち合っているブダペストの解剖医師であるケシエリユー・ヤノシユは、生命のはかなさや死後の世界、そして死に向けての準備について、揺るぎない視点を持っている。彼は死人の面倒を最後まで見る付き添い人であり、現代の終末医療に対しての、辛辣な批判家でもある。「エデンへの道」は、彼の日常を追ったドキュメンタリーであり、解剖医師としての彼の哲学についての映画である。

”死”を考える映画。
ヘドッド✓ヒューマン・ドキュメンタリー

「私たちは、禁じられた事柄や怖いものに魅かれる傾向があると思います。まるで、バンドラの箱に引き込まれるかのごとくそれらに取りつかれるのですが、死についても同じことがいえるでしょう。私は死というテーマを追及すれば追及するほど、死に馴染みが出てきました。作っていくうちに、不安はなくなっていき、テーマから逃れる代わりに立ち向かってそれと戦うようになりました。タブーの領域をかきまみれたのです」

——— ロバート・エイドリアン・ペヨ



ハンガリーの首都ブダペストで、保険局の解剖医をしているケシエリユー・ヤノシユという男の1日を、淡々と記録したドキュメンタリー映画。取材対象が解剖医ということで、映画の中には本物の解剖シーンが何度も出てきます。人間の体をバラバラに解体して行くシーンがかなり長時間に渡って映し出されますので、その手のものが苦手な人は最初から遠慮したほうが良いと思います。残酷なスプラッタ描写が売りの映画ではありませんが、解剖シーンはかなりヘビーな内容なので、観る前に体調を整えておいたほうが良いと思います。僕も今日ばかりは、万全の体調で試写に挑みました。

映画を最初から観ていれば、この作品が死体の解剖を撮影して、観客の覗き見趣味や残酷趣味を満足させようという映画ではなく、人間の生と死について、死体を通じて語らせようとしたものであることがわかります。この映画は我々が漠然と「生」と「死」を分けて考えていることに異を唱え、生と死の境界が、じつはごく小さなものでしかないことを訴えます。ホスピスに入院中の老人たちと、解剖台上の死体を、とっさには区別することが出来ないという事実。ついさっきまでは生きていた人間についてのフィルムだったので、次の瞬間には同じような老人が死体になっている。これは映画の製作者側が意図的にそうした編集をしているのです。

老人たちがホスピスで職員に身体を洗ってもらい、薄くなった毛を洗髪している場面の直後に、死体の髪の毛を洗っている場面をつなぐ。または、死体の爪を切り揃えている場面の直後に、主人公が足にできたタコを削っている場面をつなぐ。観客は目の前にあったものが、生きている人間か、それとも死体か、だんだんわからなくなってくる。生と死はそれほど肉薄したもののなのです。

この映画は単に解剖室の中だけを映すのではなく、主人公の家庭人としての側面も描いたことで、作品としての厚みを出している。職場に弁当を届けに来た娘と、主人公が話をする場面が面白かった。興味深そうに解剖室の中を見て回る娘に、器具のひとつひとつを丁寧に説明する父。彼が自分の仕事にどれほど誇りを持っているか、どれほど情熱を傾けているかが、これほどしっかりと描かれている場面はありません。こうした生活者としての面がきちんと描かれているからこそ、映画のテーマである生と死が際立ってくる。映画の中で「死」を表現するのは、ホスピスの老人たちや解剖台上の死体であり、「生」を表現するのは、主人公とその家族たちなのです。

服部 弘一郎 (映画批評家)

映画版 http://www.hi-ho-ne.jp/hattori-k/

ロバート・エイドリアン・ペヨ

1964年、ルーマニア、アラド生まれ。主な長編作品に『CRESCENDO』(1991)、『CITY DUMP』(1991)、『LIPSTICK』(1993)及び『R.I.P.』(1997)がある。なお、アメリカの画家、ジョー・コールマンを撮ったドキュメンタリー『R.I.P.』は、来春アップリンク配給により公開が予定されている。

•アップリンクの上映、出版、スタッフ募集に関する情報はアップリンクのホームページへ。www.uplink.co.jp

*解剖シーンが克明に描写されていますので配給会社と劇場の自主規制により18歳未満の方の入場をお断りします。

10月17日(土)ロードショー 11/13(金)まで
特別鑑賞券¥1,400 絶賛発売中! 当日¥1,700均一 (チケットセゾン、チケットぴあにて発売中! 劇場窓口にてお求めの方ポストカードプレゼント!)

アップリンク・スタッフ募集

「餃子」復刊! 9月未発行

配給、ファクトリー、餃子編集/希望者は書籍「DICE TALK」の感想(800字以上)と履歴書に希望職種を明記の上、9月15日までに郵送下さい。〒150-0041 渋谷区神南1-8-17 横山ビル3階 アップリンク・スタッフ募集係

連日 1:40/3:30/5:20/7:10 (入替制)



☎03(5389)6780 JR東中野駅西口北側・ホーム正面ポレポレ坐ビル地下